

精神保健福祉現場実習における自己イメージの 構造とその影響要因

大西 良・辻丸秀策・大岡由佳
鋤田みすず・福山裕夫

The structure of self-image and that influence factor on psychiatry social worker training

Ryo ONISHI, Shusaku TSUJIMARU, Yuka OOKA
Misuzu SUKITA and Hiroo FUKUYAMA

【抄録】本研究の目的は、精神保健福祉現場実習における学生の自己イメージ構造とその変化、さらに自己イメージ形成に影響を与える要因を明らかにすることであった。

結果は以下の通りである。実習前の自己イメージとして「社交性」「魅力的」「繊細さ」の3因子が抽出され、実習後では「自主性」「誠実性」「積極性」の3因子が得られた。実習後の3因子は先行研究の精神科医療従事者の自己イメージと酷似しており、学生が実習を経験することで精神科医療従事者の自己理解へと接近していることが明らかとなった。また、ボランティア経験と実習前の「社交性」因子、実習後の「自主性」「誠実性」因子との間で有意な関連性がみられ、ボランティア経験の有無が自己イメージの形成要因になっていることが明らかになった。さらに、教員や友人のサポートが、「自主性」の形成の肯定的要因になっている一方で、有害ストレスが自己イメージの形成の否定的要因であることが明らかとなった。

【キーワード】精神保健福祉現場実習 自己イメージ 実習ストレス

はじめに

現在、精神保健福祉援助技術実習（以下、「現場実習」と略す）において学生の実習体験を素材とした指導方法の具体的な提案が急務とされている。なかでも自己評価を活用した指導方法としては、いくつかの先行研究で報告がなされている^{1) 2) 3)}。ところが、著者らの知る限り、学生の自己評価に自己イメージを用いた調査研究はない。そこで本研究では、学生の自己イメージを捉え、そのイメージの変化ならびに影響要因を明らかにすることが目的である。

方法

1. 調査対象

本研究について主旨を説明し同意が得られた、精神保健福祉養成課程4年次大学生44名を対象とした。

2. 調査時期

2004年6月～10月にかけて実施した。

3. 調査内容と手続き

調査に用いた質問紙は次の2種類である。

(a) 自己イメージの測定

学生の抱く自己イメージを測定するものとして、Semantic Differential Method（以下SD法）を用いた。SD法は、Osgood, C.E¹⁾が最初に理論構成を行ったもので、もともとは、言語の意味の測定法として開発されたものである。現在、人が色彩、音楽、絵画、商品、人物など広い範囲にわたる事象に対して抱く意味あるいはそのイメージを測定する方法として利用されるようになっている。本調査では大石²⁾や井上³⁾が心理学や教育学の分野で用い、パーソナリティの測定に有効であるとする形容詞対49項目の中から使用頻度の高い30項目の形容詞対を設定した。

評定方法は30項目の質問ごとに5段階の尺度(「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」の両極回答)のうちいずれかの回答を選択させる。評定尺度の配点は、「どちらともいえない」の0点を中心に置き-2~2点までの配点を行った。したがって、得点が正の数であれば左側の形容詞が当てはまり、得点が負の数であれば右側の形容詞が当てはまることになる。

(b) 実習ストレス感情の測定

学生の実習に対するストレスの程度を測定する道具として開発されたのが、PaganaのClinical Stress Questionnaire(以下「CSQ」と略す)である。Pagana⁴⁾は、Lazarus & Folkmanのストレスの認知的評定理論に基づいて、状況を「Threat(脅威)・Challenge(挑戦)・Harm(有害)」と認知的に評価したときに起こるとされるストレス感情(脅威的感情・挑戦的感情・有害的感情)に着目し、これらの感情がストレス状態では同時に存在していると立場からCSQを作成している。

したがって、従来のようなストレスを肯定・否定のいずれか二者択一的な立場で捉えるものと異なり、多面的にストレス状況への心理的反応の把握が可能である。

その他に、年齢、性別、友人・教員からのサポートについて尋ねた。

手続きとしては、質問紙は個別に現場実習前後に配布し、その場で回収した。そして、調査結果については、実習終了後に文書にて通知、説明を行った。

4. 統計解析

自己イメージの実習前後での平均の差の検定はt検定を行った。また、自己イメージの因子構造を明らかにするために、主因子法(バリマックス回転)による因子分析を行った。さらに、自己イメージの各因子と、ボランティア経験、人的サポートの有無との関連性を明らかにするために相関分析を行った。

実習ストレスと自己イメージとの関連性については、実習ストレスの3因子をそれぞれ目的変数とする一元配置分散分析を用いて検定を行った。

なお、一連の解析には統計パッケージSPSS 11.0J for Windowsを使用した。

5. 自己イメージの概念整理

本研究では看護職の専門職の自己覚知で膨大な業績を残しているBurnard, Pの“自己イメージ(自己評価)”の概念、その中でも“真実の自己(Real self)”を引用することにする。Burnard, Pは“真実の自己(Real self)”とは、援助実践の場で、『専門職は、患者に真実の自己を包み隠さず打ち明けることが求められる』と述べて、この“真実の自己(Real self)”は自己の最も「内的な部分」をあらわすとしている。そのため、本研究の目的である援助実践家を目指す学生の自己イメージを捉えることに適当であると判断した。

結果

1. 調査対象者の特徴

本研究における対象者の性別は、女性35名(79.5%)、男性9名(20.5%)であった。年齢の平均および標準偏差は、23.23±3.70歳で20歳代が9割以上を占めている。ボランティア経験については、Table 1に示すとおり、精神保健福祉に関するボランティア経験、高齢者福祉に関するボランティア経験、その他のボランティアの経験のある者はともに、5割~6割以上で半数以上のものが何らかのボランティア経験者であった。さらに、実習中の人的サポート(教員、友人)については、Table 2に示すとおり、半数以上の学生が「サポートを得ることができた」と回答している。

Table 1 ボランティア経験の有無

	ある	ない
精神保健福祉ボランティア	52.3%	47.7%
高齢者ボランティア	65.9%	34.1%
その他のボランティア	51.2%	48.8%

Table 2 友人、教員のサポートについて

	友人	教員
得ることができた	67.4%	55.8%
得ることができなかった	32.6%	44.2%

2. 自己イメージの変化

実習前後での自己イメージの変化を表したものが

Table 3 自己イメージ30項目の実習前後比較

	非常にある	ややある	ある	どちらでもない	ある	ややある	非常にある	
活発な						●○		不活発な
理性的				●	○			感情的な*
決断力のある						●○		決断力のない
親切な							◎	不親切な
おしゃべりな						●○		無口な
繊細な			◎					大まかな
強い			●	○				弱い*
真面目な						○●		不真面目な
外向的な				●○				内向的な
のんびりした						○●		てきぱきした
おおらかな						●○		気持ちの細やかな
野心のある				○●				野心がない
派手な				●○				地味な
家庭的な							●○	非家庭的な
頼もしい				○●				頼りない
細やかな				○●				雑な
誠実な						●○		不誠実な
楽観的な					○●			悲観的な
指導力のある			○		●			指導力のない*
たくましい						●○		弱弱しい
温かい							○●	冷たい
意志強固な							◎	意志薄弱な
社交的な						○●		非社交的な
自主的な					●	○		依存的な*
慎重な						●○		軽率な
魅力のある						●○		魅力のない
視野の広い						●○		視野の狭い
明るい							●○	暗い
積極的な						○●		消極的な
優雅な				○●				粗野な

注) ○：実習前 ●：実習後 ◎：前後一致
前後の変化に有意差 (t検定) が認められた項目に*を記している。 (* P<0.05)

Table 3 である。自己イメージ測定30項目のうち、変化に有意差を認めた (P<0.05) 項目は、「理性的な-感情的な」(t値=2.28 df=43 p<0.05), 「強い-弱い」(t値=1.98 df=43 p<0.05), 「指導力のある-指導力のない」(t値=-2.65 df=43 p<0.05), 「自主的な-依存的な」(t値=2.45 df=43 p<0.05) の4つであった。これら4項目についてみると、「理性的な-感情的な」, 「強い-弱い」, 「自主的な-依存的な」は、それぞれ「理性的な」, 「強い」, 「自主的な」と肯定的内容であったが、「指導力のある-指導力のない」は実「指導力のない」と否定的なものへと変化していた。

3. 自己イメージの因子構造

1) 実習前の自己イメージについて

実習前の自己イメージの因子分析結果を Table 4 に示す。この因子分析は、主因子法の Kaiser の正規化を伴わないバリマックス回転を施したものである。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化および解釈可能性からそれぞれ3因子解を適当と判断し、これを採用した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合性の信頼係数 (α係数) を求めたところ、高い信頼性が確認された。なお、因子負荷量の絶対値が0.50以下の項目については削除するものとした。

各因子の内訳は、実習前の第1因子8項目 (α=0.897), 第2因子7項目 (α=0.861), 第3因子8項目 (α=0.821) であり、因子の内容は以下に示す通りである。第1因子は因子負荷量の高い順に、「外向的な」「社交的な」「活発な」「積極的な」「お

Table 4 実習前の自己イメージの因子構造

	第1因子	第2因子	第3因子
外交的な-内向的な	0.831	0.240	-0.169
社交的-非社交的	0.800	0.066	0.108
活発な-不活発な	0.752	0.378	-0.151
積極的な-消極的な	0.733	0.490	-0.047
おしゃべりな-無口な	0.688	0.054	-0.264
明るい-暗い	0.679	0.390	0.204
のんびりした-てきぱきした	-0.624	0.039	-0.355
派手な-地味な	0.533	0.103	-0.356
野心のある-野心がない	0.457	-0.258	-0.050
指導力のある-指導力のない	0.397	0.281	0.175
視野の広い-視野の狭い	0.021	0.869	0.085
魅力のある-魅力のない	0.360	0.715	0.002
頼もしい-頼りない	0.386	0.649	0.374
たくましい-弱々しい	0.558	0.637	0.132
優雅な-粗野な	-0.220	0.611	0.352
決断力のある-決断力のない	0.418	0.595	-0.002
強い-弱い	0.351	0.551	-0.251
温かい-冷たい	-0.049	0.477	0.257
楽観的な-悲観的な	0.405	0.471	-0.285
理性的-感情的	0.021	0.443	0.157
自主的-依存的	0.402	0.422	0.095
真面目な-不真面目な	0.372	0.156	0.724
家庭的な-非家庭的な	0.081	0.117	0.684
細やかな-雑な	-0.297	0.183	0.655
誠実な-不誠実な	0.360	0.202	0.644
親切的な-不親切的な	0.083	0.117	0.591
おおらかな-気持の細やかな	0.229	0.406	-0.578
繊細な-大まかな	-0.249	-0.080	0.531
慎重な-軽率な	-0.193	0.205	0.523
意志強固な-意志薄弱な	0.386	0.332	0.426
累積寄与率 (%)	21.1	38.3	52.5

Table 5 実習後の自己イメージの因子構造

	第1因子	第2因子	第3因子
楽観的な-悲観的な	0.771	0.018	0.080
おおらかな-気持の細やかな	0.757	-0.083	-0.193
自主的-依存的	0.660	0.142	0.234
たくましい-弱々しい	0.646	0.371	0.258
決断力のある-決断力のない	0.643	-0.148	0.332
強い-弱い	0.586	0.013	0.085
活発な-不活発な	0.585	0.123	0.480
視野の広い-視野の狭い	0.579	-0.072	0.286
指導力のある-指導力のない	0.478	0.446	0.446
誠実な-不誠実な	0.328	0.810	0.020
家庭的な-非家庭的な	-0.018	0.795	0.061
意志強固な-意志薄弱な	0.296	0.716	-0.151
優雅な-粗野な	0.081	0.650	-0.185
慎重な-軽率な	-0.259	0.646	0.034
温かい-冷たい	0.368	0.623	0.197
頼もしい-頼りない	0.505	0.614	0.063
繊細な-大まかな	-0.389	0.610	-0.176
細やかな-雑な	-0.400	0.599	0.045
魅力のある-魅力のない	0.367	0.573	0.329
真面目な-不真面目な	-0.234	0.557	0.404
明るい-暗い	0.347	-0.062	0.786
おしゃべりな-無口な	0.021	-0.172	0.741
社交的-非社交的	0.399	0.111	0.719
理性的-感情的	0.267	-0.018	-0.634
積極的な-消極的な	0.547	0.140	0.617
野心のある-野心がない	0.279	-0.024	0.587
派手な-地味な	0.227	-0.472	0.540
のんびりした-てきぱきした	-0.056	-0.003	-0.523
外向的な-内向的な	0.429	0.188	0.496
親切的な-不親切的な	0.130	0.306	0.480
累積寄与率 (%)	19.4	38.1	55.0

しゃべりな」「明るい」「てきぱきした」「派手な」の8項目からなり、それを「社交性」因子と命名した。第2因子は因子負荷量の高い順に、「視野の広い」「魅力のある」「頼もしい」「たくましい」「優雅な」「決断力のある」「強い」の7項目からなり、それを「魅力的」因子と命名した。第3因子は因子負荷量の高い順位に、「真面目な」「家庭的な」「細やかな」「誠実な」「親切的な」「気持の細やかな」「繊細な」「慎重な」の8項目からなり、それを「繊細さ」因子と命名した。

2) 実習後の自己イメージについて

実習後の自己イメージの因子分析結果を Table 5 に示す。この因子分析についても、実習前と同様に、主因子法の Kaiser の正規化を伴わないバリマックス回転を施したものである。その結果、スクリー基

準に基づく固有値の変化および解釈可能性からそれぞれ3因子解を適当と判断し、これを採用した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合性の信頼係数 (α 係数) を求めたところ、高い信頼性が確認された。

実習後の第1因子8項目 ($\alpha=0.911$)、第2因子11項目 ($\alpha=0.837$)、第3因子8項目 ($\alpha=0.772$) であった。第1因子は因子負荷量の高い順に、「楽観的な」「おおらかな」「自主的な」「たくましい」「決断力のある」「強い」「活発な」「視野の広い」の8項目からなり、それを「自主性」因子と命名した。第2因子は因子負荷量の高い順に、「誠実な」「家庭的な」「意思強固な」「優雅な」「慎重な」「温かい」「頼もしい」「繊細な」「細やかな」「魅力のある」「真面目な」の12項目からなり、「誠実さ」因子と命名した。第3因子は因子負荷量の高い順に、「明る

い」「おしゃべりな」「社交的な」「感情的な」「積極的な」「野心のある」「派手な」「てきぱきした」の8項目からなり、「積極性」因子と命名した。

4. 自己イメージへの影響要因

まず、ボランティア経験と自己イメージの関連性についてみるために、相関分析を行った。その結果、精神保健福祉ボランティア経験のあるものは、実習前の「社交性」因子と正の相関 ($r = 0.821$ $p < 0.01$) であった。また、高齢者、児童福祉関係のボランティア経験あるものは、実習前の「社交性」因子、実習後の「誠実さ」因子で正の相関（「社交性」： $r = 0.629$ $p < 0.01$, 「誠実さ」： $r = 0.801$ $p < 0.01$ ）が認められた。それを図に表したものが Figure 1 である。

次に、教員、友人のサポートと自己イメージの関連についても同様に相関分析を行った結果、教員、友人のサポートともに「自立性」因子とに正の相関

（教員のサポート： $r = 0.774$ $p < 0.01$, 友人のサポート： $r = 0.776$ $p < 0.01$ ）が認められた。それを図に表したものが、Figure 2 である。

5. 自己イメージ形成と実習ストレスの関係

自己イメージと実習ストレスとの関連を検討した。その結果、挑戦ストレス（快ストレス）と「誠実さ」とに有意な関連がみられた ($F_{(18, 20)} = 2.58$ $p < 0.05$)。Figure 3 はこの2つの関係について表したもので、挑戦ストレスが増大するほど「誠実さ」因子の得点が増加する傾向が示された ($r = 0.32$ $p < 0.05$)。また、有害ストレス（不快ストレス）と「誠実さ」とに有意な関連がみられた ($F_{(10, 31)} = 2.17$ $p < 0.05$)。Figure 4 はこの2つの関係について表したもので、有害ストレス（不快ストレス）が増大するほど「誠実さ」因子の得点は減少することが明らかとなった ($r = -0.46$ $p < 0.01$)。

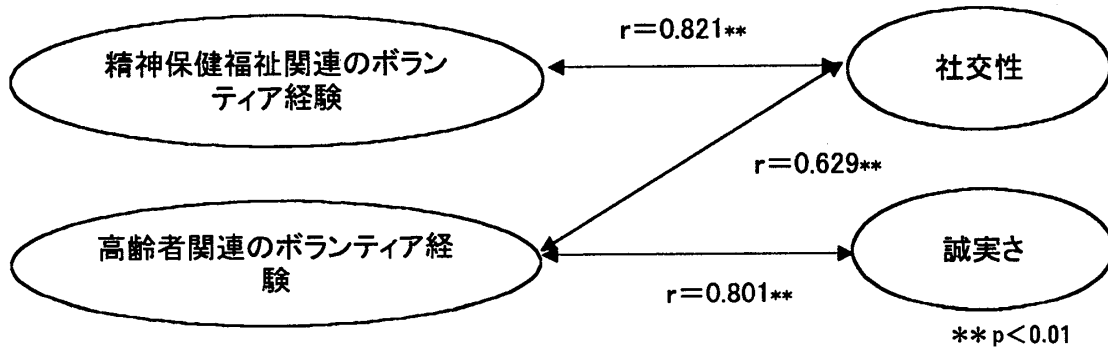


Figure 1 自己イメージとボランティア経験との相関

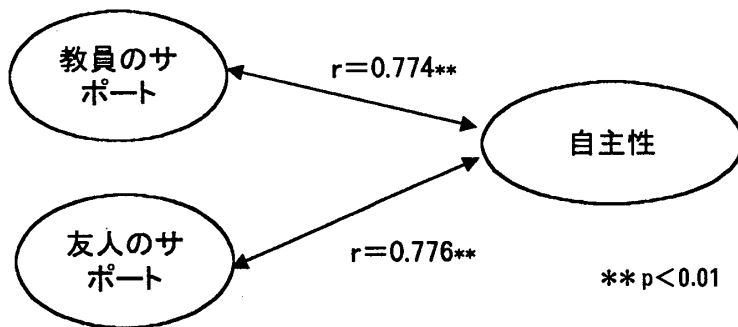
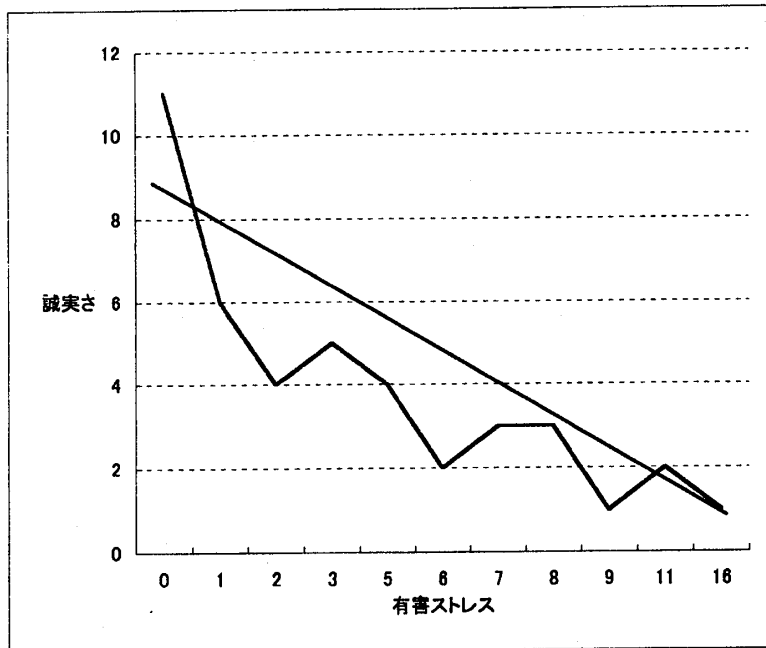
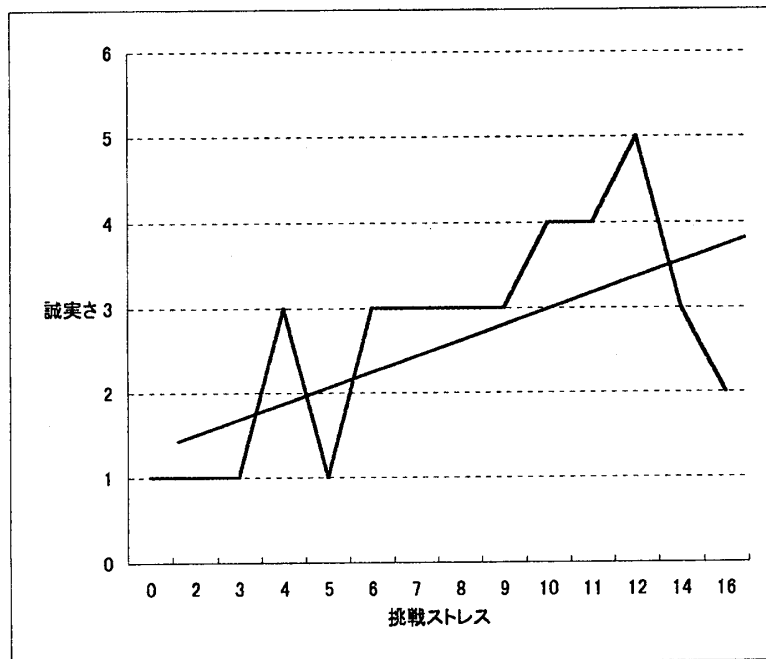


Figure 2 教員、友人のサポートと自己イメージとの相関



Pearsonの相関係数(r) = -0.46 $p < 0.01$

Figure 3 挑戦ストレスと「誠実さ」の相関



Pearsonの相関係数(r) = 0.32 $p < 0.05$

Figure 4 有害ストレスと「誠実さ」の相関

考 察

1. 学生の自己イメージの特徴

本研究の結果、実習前後で有意に変化のあった項目は、「理性的な－感情的な」、「強い－弱い」、「自主的な－依存的な」、「指導力のある－指導力のない」の4つであった。

この4つの自己イメージの内容は、「理性的」「強い」「自主的な」という肯定的な自己評価と「指導力のない」という否定的な自己評価の両方が含まれていた。

この結果は、植田¹¹⁾らが、精神科勤務者を対象に自己イメージを測定した研究結果と酷似するものであったことは、非常に興味深い。

そもそも、ソーシャルワーカーの援助態度について、横山¹²⁾は、「相手の価値観を認めるためには、自分自身の価値観と対決させなければならないことがよくある。そのためには、自分自身を理解する必要がある。つまり、人間を理解するためにまずしなければならないことは、突き詰めれば、自分自身を理解することだといえる。言い換えれば、自分自身を正しく認識することである」と述べているように、相手の立場に立って価値観を認めることは、自分自身を客観的に見つめ、自己の態度を認識することであろう。

本研究では、学生が実習を経験することによって、学生の自己イメージが、現場で働く専門職のものに近づいたことは、学生が実習を通じて、利用者や家族と向き合い、刻々と変化する利用者の状況に対して適切に援助業務を実施する力を身につけ、援助サービスを提供する専門職として成長し、それを自覚していることだといえよう。

2. 実習ストレスが自己イメージに与える影響について

つぎに、実習ストレスと自己イメージとの関連について述べる。本研究から、「誠実さ」イメージに実習ストレスのなかでも、とくに挑戦ストレスと有害ストレスが関係しており、有害ストレスが「誠実さ」イメージを低下させ、挑戦ストレスが「誠実さ」イメージを上昇させることを導き出した。

特に、有害ストレス、言い換えれば不快ストレスによって「誠実さ」という自己イメージの形成が妨げられたことは、専門職としての自己認識が歪められることにつながるのではなかろうか。これは、学生が実習という専門家としての最初の段階で、専門職としての自己イメージの形成が図れず、路頭に迷うことになるであろう。実習では、個人差はあるとしても「燃える」「勇気がわく」というようなモチベーションを維持・向上できる環境が必要となるであろう。

また、ボランティア経験や人的なサポートと自己イメージに関連がみられたことは、自己イメージの形成に実習前の体験学習や実習中のソーシャルサポートが関与していると思われる。今後はストレス以外の要因についても検討していく必要がある。

3. 自己イメージを活用した教育的指導・ケアについて

ここでは、自己イメージ活用した教育的指導とケアについて述べたい。澤田¹³⁾は教育的指導でもっとも重要となるのは、他者を尊重し、相互の信頼関係を発展させていくプロセスの中で個人をより高次の自己へと成長させる援助行動や対処行動であると定義づけている。また、これに続けて澤田は、教育的指導によって、自己を他者に投射し、他者が今どのように見えているのか感じ取ることができ、これによって自己が気づいていなかった他者への意味や感じ方を促すと指摘している。本研究では、学生が専門職の抱えている自己イメージに接近することが明らかとなった。学生の自己理解はあくまでも学生によるものであり、指導者は学生を外から見ているだけではどのように学生自身を理解しているかを知ることではできない。しかし、学生と語り合う場を持つことで指導者と学生とが体験を共有し、その体験について学生と指導者が語り合うことは、捉えられなかった自己の内的世界に気づかされ、自分自身に問いを向ける機会となると考える。このような自己への気づきによって、学生は自分に意識を向け、自覚することになるこのことを渡邊¹⁴⁾は「反省的意識」と述べており、反省を通してより深く自分を掘り下げて見つめることができ、自分の存在に触れることが可能になるといえよう。

最後に、河合³⁾が“イメージ”について「明確に定義することは気をつけないと難しい問題である」と指摘しているように、自己イメージを活用する上での注意すべき点について述べる。“自己イメージ”の概念に関する先行研究をみると、久保⁴⁾は、他者からの評価が、自己評価と密接に関わっていると述べ、「自己」は、社会的な環境の中で形成されるものであり、さまざまな要因が“自己”に影響を与えるものと定義されたとしている。また、橋口⁵⁾は“自己イメージ(自己評価)”について『私たちは、しばしば「私は～のような人物である」といったかたちで、自分自身についての情報を他者に伝えようとする。この場合、思っているまま、感じているままの自己像ではなく、「選択した」自己像を伝えることが少なくない。自分の特定の側面を見せ、他の側面は見せないといった選択が行われる。』と自己を二面的に捉えることの必要性を述べている。さらに、Burnard, P⁶⁾は“自己”について以下の8つの概念を示している。それは、①身体的自己(Physical self) ②真実の自己(Real self) ③理想的自己(Ideal self) ④他者にとっての自己(Self-for-others) ⑤社会的自己(Social self) ⑥精神的自己(Spiritual self) ⑦影の自己(Darker self) ⑧性的自己(Sexual self)である。

本研究では援助専門職を目指す学生の自己イメージを捉えることのために、Burnard, Pの“真実の自己(Real self)”の概念を応用したが、“自己イメージ(自己評価)”の概念についてはさまざまな観点や捉え方があるため、今後は精神保健福祉の専門職を目指す学生に対応した自己イメージ測定尺度の開発が課題となった。

まとめ

本研究では、精神保健福祉現場実習における福祉学生の自己イメージ構造とその変化、さらに自己イメージの形成に影響を与える要因を明らかにした。その結果、実習終了後の学生の自己イメージは、精神科に勤務する臨床家の持つ自己イメージと類似するものへと変化することが明らかとなった。また、教員や友人などのソーシャルサポートの有無やボランティア経験の有無が、自己イメージの形成と関係

性を持つことを明らかにした。さらに、実習ストレスと自己イメージの関連では、不快に感じるストレスが、学生の「誠実性」自己イメージの形成を阻害する要因となっていることがわかった。

文献

- 1) 山井理恵 社会福祉現場実習における学習達成に及ぼす要因～学生の評価からの分析～ 社会福祉実践理論研究 第7号 p23-p32 1998
- 2) 南彩子 登丸寿一 社会福祉援助技術現場実習における総合的評価をめざして～学生・現場指導者・教員の三者による評価を通じて～ 社会福祉実践理論研究 第9号 p89-p100 2000
- 3) 山井理恵 社会福祉現場実習における学生の自己評価～学習効果に関連する要因～ 社会福祉実践理論研究 第8号 p55-p68 1999
- 2) 宮崎まさ江 教育機関における「精神保健福祉援助実習」教育のあり方と今後の課題 精神保健福祉士協会誌 精神保健福祉 (PSW) Vol.32 No.1 通巻45号 p19-p24 2001
- 3) 河合隼雄 イメージの心理学 p14-p22 青土社 1991
- 4) 久保真人 自己評価と自己呈示スタイルとの関係 社会心理学研究 第14巻第2号 p78-p85 1998
- 5) 橋口捷久 自己範疇化と自己概念 福岡県立大学紀要 第2巻 第1号 p1-p14 1993
- 6) Burnard, P Counselling attitudes in community psychiatric nurses. Community Psychiatric Nursing Journal. 9(5) p26-p29 1989
- 7) Osgood, C.E The nature and measurement of meaning. Psychol. 49 p197-p237
- 8) 大石勝代 大学生、中学生および精神分裂病者における意味構造の比較 心理学研究 第45巻 第1号 p21-p31 1974
- 9) 井上正明 小林利宣 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究 第33巻 第3号 p69-p76 1985
- 10) Pagana KD. Psychometric Evaluation of the Clinical Stress Questionnaire. Jour-

- nal of Nursing Education 28 169-174 1989
- 12) 横山登志子 精神保健福祉領域の「現場」で生成するソーシャルワーカーの援助観～ソーシャルワーカーの自己規定に着目して～ 社会福祉学 第45巻第2号 p24-p33 2004
- 13) 澤田節子 甲斐春代 加藤幸恵 植村章子 三上和恵 「ケアする人」「ケアされる人」に求められるケアリング～臨地実習における指導場面の分析から～ 看護教育 Vol.46 No.2 p104-p109 2005
- 14) 渡邊美千代 学生と指導者との間の相互作用に関する研究～実存的-現象学的作用の視点から～ 日本看護学教育学会誌 Vol.10 No.3 p1-p9 2000
-